

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごしょうそく

上野殿御消息

しとくしおん こと

（四徳四恩の事）

新版
1850
〜
1852

うえのどのごしようそく しとくしおん こと

上野殿御消息（四徳四恩の事）

けんじがんねん

建治元年（'75）

さい

なんじようときみつ

54歳

南条時光

さんぜ しょうつ よ い

たま

みなみなしおん ほう

三世の諸仏の世に出でさせ給いても、皆々四恩を報ぜよ

と さんこうごてい こうし ろうし がんかいとう いにしえ けんじん しとく

と説き、三皇五帝、孔子・老子・顔回等の古の賢人は、四徳

しゆ しとく いち ふ ぼ こう に

を修せよとなり。四徳とは、一には父母に孝あるべし、二に

しゆ ちゆう さん とも あ れい し

は主に忠あるべし、三には友に合つて礼あるべし、四には

おと あ じひ

劣れるに逢つて慈悲あれとなり。

いち ふ ぼ こう おや お ぼ あ

一に父母に孝あれとは、たとい親はものに覚えずとも、悪

様 い

しざまなることを云うとも、いささかも腹も立てず、誤る

あやま

顔を見せず、親の云うことに一分も違えず、親によき物を与
えんと思つて、せめてすることなくば、一日に二・三度えみ
て向かえとなり。

二に主に合つて忠あるべしとは、いささかも主にうしろ

めたなき心あるべからず。たとい我が身は失わるとも、主

にはかまえてよかれと思うべし。「かくれての信あれば、

あらわれての徳あるなり」と云々。

三には友におうて礼あれとは、友達の一日に十度二十度

来れる人なりとも、千里二千里来れる人のごとく思つて、

礼儀いささかおろかに思ふべからず。

四に劣れる者に慈悲あれとは、我より劣りたらん人をば

我が子のごとく思つて、一切あわれみ、慈悲あるべし。こ

れを四徳と云うなり。かくのごとく振る舞うを、賢人とも

聖人とも云うべし。この四つのことあれば、余のことにはよ

からねどもよき者なり。かくのごとく四つの徳を振る舞う

人は、外典三千卷をよまねども、読みたる人となれり。

一に仏教の四恩とは、一には父母の恩を報ぜよ、二には

国主の恩を報ぜよ、三には一切衆生の恩を報ぜよ、四には

さんぼう おん ほう
三宝の恩を報ぜよ。

いち ふぼ おん ほう

一に父母の恩を報ぜよとは、父母の赤白二涕、和合し

わ み はは たいない やど にひやくしちじゅうにち このつき

て我が身となる。母の胎内に宿ること二百七十日、九月の

あいだ さんじゅうしち し くる

間、三十七度、死ぬるほどの苦しきあり。生み落とす時、

堪 おも ねん いき いただき い けむり ぼんてん いた

たえがたしと思ひ念ずる息、頂より出ずる煙、梵天に至

う お ちち 飲 いっぴやくはちじゅうよこく さんねん

る。さて生み落とされて乳をのむこと一百八十余石、三年

あいだ ふぼ ひざ あそ ひと ぶつきよう しん

が間は父母の膝に遊び、人となりて仏教を信ずれば、ま

ちち はは おん ほう ちち おん たか しゅみせん

ずこの父と母との恩を報ずべし。父の恩の高きこと、須弥山

低 はは おん ふか たいかい かせ あさ あいかま

なおひきし。母の恩の深きこと、大海還つて浅し。相構え

て父母の恩を報ずべし。

ふ ぼ おん ほう
に こくしゅ おん ほう

二に国主の恩を報ぜよとは、生まれて已来、衣食のたぐい

は じ み な こくしゅ おん え

より初めて、皆これ国主の恩を得てあるものなれば、「現世

あん のん のち ぜんしよ しょう

いの たてまつ

安穩にして、後に善処に生ず」と祈り奉るべし。

さん いっさいしゅじよう おん ほう

むかし いっさい

三に一切衆生の恩を報ぜよとは、されば、昔は一切の

おとこ ちち おんな はは

しょうじようせぜ みなおん

男は父なり、女は母なり。しかるあいだ、生々世々に皆恩

しゅじよう みなほとけ おも

ある衆生なれば、皆仏になれと思うべきなり。

し さんぽう おん ほう さいしよじようどう けこんぎよう たず

四に三宝の恩を報ぜよとは、最初成道の華嚴経を尋ぬれ

きよう だいじよう ほとけ ほうしんによらい

ば、経も大乘、仏も報身如来にてましますあいだ、二乗

にじよう

とう ひる ふくろう よる たか

等は昼の梟、夜の鷹のごとくして、かれを聞くといえど

みみ癢 め癢

も、耳しい・目しいのごとし。しかるあいだ、四恩を報ず

おも によにん 嫌

べきかと思うに、女人をきらわれたるあいだ、母の恩報じ

つぎ ほとけ あごん しょうじようきよう と たま

がたし。次に、仏、阿含の小乗経を説き給いしこと

じゅうにねん しょうじよう われ き 随

十二年、これこそ小乗なれば我らが機にしたがうべきか

おも おとこ ごかい おんな じっかい ほつし にひやくごじっかい あま

と思えば、男は五戒、女は十戒、法師は二百五十戒、尼は

ごひやくかい たも さんぜん いぎ ぐ と まっだい

五百戒を持って三千の威儀を具すべしと説きたれば、末代

われ 叶 覚 はは おんほう

の我らかなうべしともおぼえねば、母の恩報じがたし。い

きよう 嫌 ほうどう はんにや しじゅうよねん

わんや、この経にもきらわれたり。方等・般若、四十余年

きようぎよう

みな

によにん

てんによじようぶつきよう

の経々に皆、女人をきらわれたり。ただ転女成仏経・

かんぎようとう

によにん

とくどう

きようもんあ

観経等にすこし女人の得道の経文有りといえども、ただ

な

あ

じつ

うえ

みけんしんじつ

きよう

名のみ有つて実なきなり。その上、未顕真実の経なれば、

しじゆうよねん

きようぎよう

みな

によにん

きら

いかんがありけん。四十余年の経々に皆、女人を嫌われ

さいご

と

たま

ねはんぎよう

によにん

きら

たり。また最後に説き給いたる涅槃経にも女人を嫌われた

り。

しおん

ほう

きようあ

たず

ほけきよう

いずれか四恩を報ずる経有りと尋ねれば、法華経こそ

によにんじようぶつ

きよう

はっさい

りゆうによじようぶつ

ほとけ

女人成仏する経なれば、八歳の竜女成仏し、仏の

いも

きようどんみ

やしゆだらびくに

きべつ

与

姨母・憍曇弥、耶輸陀羅比丘尼、記別にあずかりぬ。され

われ

はは

によにん

たい

そうら

ちくしやう

ば、我らが母はただ女人の体にてこそ候え、畜生にもあ

じやしん

はっさい

りゆうによ

ほとけ

成

らず、蛇身にもあらず。八歳の竜女だにも仏になる、い

きやう

ちから

わ

はは

ほとけ

かんぞ、この経の力にて我が母の仏にならざるべき。さ

ほけきやう

たも

ひと

ちち

はは

おん

ほう

わ

れば、法華経を持つ人は、父と母との恩を報ずるなり。我が

こころ

ほう

おも

きやう

ちから

ほう

心には報ずると思わねども、この経の力にて報ずるなり。

しやか

たほうとう

じつぼうむりやう

ほとけ

じやうぎやう

しかるあいだ、釈迦・多宝等の十方無量の仏、上行・

じゆとう

ぼさつ

ふげん

もんじゆとう

しやつけ

だいじ

しやりほつとう

地涌等の菩薩も、普賢・文殊等の迹化の大神も、舍利弗等の

しよだいしやうもん

だいぼんてんのう

にちがつとう

みやうしゆしよてん

はちぶおう

諸大声聞も、大梵天王・日月等の明主諸天も、八部王も

じゆうらせつによとう

にほんこくじゆう

だいしやう

しよじん

そう

十羅刹女等も、日本国中の大小の諸神も、総じて、この

ほけきよう つよ しん よねん ひとすじ しんこう もの

法華經を強く信じまいらせて余念なく一筋に信仰する者を

かげ み 添 まも たま そうろう あいかま あい

ば、影の身にそうがごとく守らせ給い 候なり。相構えて相

かま こころ ひるがえ ひとすじ しん たも げんぜあんのん

構えて、心を翻さず一筋に信じ給うならば、「現世安穩に

のち ぜんしよ しやう きやうきやうきんげん

して、後に善処に生ず」なるべし。恐々謹言。

にちれん かおう

日蓮 花押

うえのどの

上野殿